

ICBA Newsletter

チャンタソンさん講演会	2
総会を終えて / ダンさん講演会 in コアラ文庫	3
UK 支部30周年記念イベント報告	4~5
ハンブティダンブティ文庫	6
セミージャ文庫	7
English Edition	8~13
みっきいのミュージックワークショップ	14
活動報告 お知らせ	15
マイブックシェルフ	16

国際児童文庫協会 ニュースレター No 69, November. 2009

異文化での 子育て体験から

～第39回 ICBA 総会・講演会講師

チャンタソン・インタヴォンさん～



「娘が本を好きになり、自分の世界をどんどん広げていくのを見て、とても羨ましく思いました。ラオスでは、身近に本がないため、ラオスの子どもは本を読んだり、読んでもらったりすることが無いからです。」
チャンタソンさんのお話より」

6月19日（金）東京・青山ウィメンズプラザにて、第39回 ICBA 総会を行ないました。始まりはみっきいの司会でアイスブレイク。集まってくださった方々の素顔が見えました。続いて昨年度の活動の中から、3月のコアラ文庫でのダンさんの講演会についてマートスさんより報告（酒井さんの報告を代読）いただきました。また一時帰国中の運営委員渡辺鉄太さんがメルボルンこども文庫の活動や、山火事の被害などについてお話をくださいました。さくら文庫の森岡さんが作ってくださった素敵なお菓子でほっと一息ついた後は講演会。毎年総会時に行なわれている講演会は、文庫活動や私たち自身の学びに繋がるようにとの意味が込められています。お迎えした「ラオスのこども」の代表をされているチャンタソンさんのお話は、異文化での子育て経験にとどまらず、ひとりの女性の生き方として、私たちにいろいろなことを考えさせてくれるものでした。ランチをとりながらの懇親会にも大勢の方が参加くださいました。マイクを回しての自己紹介では、いろいろなお話を聞くことができ、日頃、直接会うことが難しい会員同士の交流の場となったようです。



出版した絵本を紹介してくださるチャンタソンさん

チャンタソン・インタヴォンさん

(Chanthasone INTHAVONG)

1953 年ラオス・ヴィエンチャン市生まれ。1981 年御茶の水女子大学大学院人文科学研究科卒業後、1982 年 NPO 法人「ラオスのこども」（2008 年 IBBY 朝日国際児童図書普及賞受賞）設立。共同代表を務める。1991 年には「ラオスの女性とともに仕事を作る会」を設立。女性自立に必要な技術を取得する施設「ホアイアン職業訓練センター」を設立。



「異文化での子育て体験から」講演会を聞いて

リトルインディアン文庫 日高 歩

講師のチャンタソンさん。人をひきつける魅力あふれる聡明な方で、茶目っ気のある表情とユーモアたっぷりのよどみない日本語でにこやかに話をされます。

しかし、そのいとも軽やかに話されるご自身の歩みは実に圧倒されるものでした。

仏語、英語、ラオス語、さらに日本語を習得しようと日本に留学される向上心。さて、こんなに優秀な方が何を仕事として生きていかれるのだろうと興味を持ちますが、目を向けられたのは「絵本」でした。（幸いなことに！）

「絵本を楽しむ体験をラオスの子どもたちに」との思いからスタートし、その活動は・・・①日本語のままの本をラオスに送る。②日本語の本をラオス語に翻訳しその本に貼り付けて送る。③ラオス語の本を出版。④絵本作家や絵描きを養成するために、日本の絵本作家によるセミナーを実施。⑤小学校に移動図書館を送ったり図書室を設置する。⑥子どもたちの自己表現として本読み、伝統音楽、踊りなどができる子どもセンターなどの施設作り。⑦英語と日本語の語学学校の主宰。特定非営利活動法人「ラオスのこども」代表・・・とここまで大きく広がりました。

何もないところから立ち上げ、ないなら作ろう、知らないなら教えよう、と前へ前へ根気強く歩んできた30年間だったのでしょう。その長いみちのりを思うと、とてもできないことだとただただ感服するのみですが、目の前のチャンタソンさんは実にうれしそうに、相変わらずにここにこされているのです。この魅力！私にも何かお手伝いできないものだろうかと思うずにはいられないそのお人柄。この活動はチャンタソンさんならではと思われる所以です。

そんなチャンタソンさんの悩みの一つが、目の前に本があっても子どもたちがそれを読まないこと、と聞き、またその原因が、あっという間に普及したテレビやゲームにあるのではないかと話を聞くと、こちらは世界共通の現象なのだと納得します。

でも（だからこそ？）日本を考えると、本を身近にとの取り組みはむしろ今の方が盛んなように見えます。本の読み聞かせはブームになっていてそのために雑誌まで出るほどですし、本を読ませたいという親の思いは高まっているように見えます。テレビに釘づけになっている子どもも、ふと本を手取る時間がある。そんな瞬間を大切に、まさにチャンタソンさんの歩みの如く、あきらめないで続けること、そうやって引き継いでいくことが出来たらと願わずにはられません。

「言葉」というのは文化の中心だ、とつくづく思います。時代の変化によって少しずつ形が変わることはあっても、私たちの言語が日本語（ラオス語）であることは変わらないし、活字離れといっても活字がなくなることは考えられません。もし私たちが日本語（ラオス語）を使うことを禁止され、他の言語を使うことを強制されたとしたら、あっという間に自分たちのよりどころをなくしてしまうような絶望感におそわれるのでは？と想像するほどに言葉はその国の文化の中心なのではと思うのです。

チャンタソンさんがその言葉（絵本）を通じて豊かな文化を広げようと活動されていることは、まさに私たちが日々文庫で取り組んでいることと同じです。

チャンタソンさんは次のステップに向けて、すでに寮つきの学校のための土地を購入済みだそうです。とどまるところを知らないその活動に大いに刺激を受け、絵本や言葉や文化の周辺のことについても思いを巡らせるよい機会を与えられました。ラオス、行ってみたいなあ・・・

特定非営利活動法人「ラオスのこども」

1982年より、ラオスの子どもたちの教育環境の向上を願い、日本および現地ラオスで活動を行っている国際協力NGOです。ラオスでの絵本・児童書の出版・学校への図書の配付・学校図書室の設立運営支援・教員の研修を通じた読書習慣の普及、本や紙芝居の活用による学校教育の充実・作家や画家、編集者など本の作り手の育成、そして、子どもが集い遊び学べる場である「子ども文化センター」の運営支援など、子ども自らが学ぶ力を伸ばす環境を生み出す活動に取り組んでいます。HPより <http://homepage2.nifty.com/aspbtokyo/index.htm>



ICBA 総会を終えて

代表 丸山 明栄

ICBA は今年で創立 30 周年です。だんだん文庫創設から 32 年です。

IC 文庫が 30 年以上も続いてきたのは、時代の要請であり、そこにニーズがあったからですが、何よりも IC 文庫を担うその時々母親や父親の地道な活動、そして想いが次を担う世代へと確実に渡されてきたからなのだと思います。

今、世の中は 100 年に一度の経済危機といわれ、今までの価値観が問い直されています。また、技術の発達により、人とのコミュニケーションをますますインターネットに依存してきています。こういう時代にあって、物語を中心に据えた人の輪であり、直接に人と人が向き合う場である文庫の役割はますます大きくなるのではないかと思います。それと同時に新たなこの時代をともに生きる私達もやはり、本の先に何をみようとしているのかをもう一度立ち止まって考え、“reset” していかなければいけないのではないかと思います。文庫を担う大人、そして何よりも子ども達が “feel good” な文庫活動を続けていかれるよう、みなさまのご意見や考えを聞かせていただき、これからの方向を見据えた必要な作業を進めてゆきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

◆総会で 2008 年度活動報告書を配布いたしました。ご希望の方は事務局(icba@g00.itscom.net)まで。



ダンさんを “コアラ文庫” にお呼びして 2009. 3. 14

コアラ文庫 酒井ゆき子

ICBA 主催の講演会の翌日、小雨の降る中、素敵な笑顔と共にダンさんはいらっしゃいました。

一般の方への案内もした為、当日はバイリンガル教育に興味をお持ちの方、英語教育に携わる方などの多数の参加があり、IC 文庫の役割からことばを取り巻く環境の変化、子ども達の可能性についてのお話に興味深く聞きっていました。質疑応答も含めた 1 時間半はあっという間に過ぎ、その後の懇親会でもダンさんを囲んで話はつきませんでした。

約 1 年前、語学教育とは違う言葉へのアプローチが文庫活動にはあり、のんびりと絵本や本にふれる場がことばや人を豊かに育んでいくことに気づかせてくださったダンさんのお話をコアラ文庫の人たちと一緒に聞きたいと想ったことが始まりでした。ICBA のみなさま、OB、OG の温かいサポートにより当日を迎え、終了後、参加者から開催したことへの感謝のことばや、これからの英語教育に必要な内容であったとの感想を頂きました。

ダンさんは講演会前に通常の文庫活動にも参加くださいましたが、子どもたちを一瞬で魅了し、まるで前からその場に居たような和やかな空気を作り出していました。

魔法のようなその笑顔を私も持つことが出来るかしら……などと思いつつ、身近に出会える機会をくださったことに感謝し、豊かなことばと人が育まれる場を創っていきたいと思いました。



コアラ文庫の子ども達に
絵本を読み聞かせるダンさん



ICBA創立 30 周年記念お祝い会

UK支部マネージャー 森嶋瑤子

2009 年 10 月 10 日（土）にUK支部の 14 文庫が、ロンドンの西部のアクトンにある日本人学校の体育館に集まってお祝いの会を賑やかに、楽しく開きました。

UK支部には現在 22 文庫が所属していますが、ロンドンでの

行事に参加するには遠い地域にある 6 文庫および夏休み後に活動を始めたため準備ができなかった新 2 文庫は、残念ながら参加出来ませんでした。舞台設備のない体育館では演技が床の上で行なわれ、観客には少々見難いという欠点はあったのですが、子どもが 143 人、大人は招待客を含めると 163 人という大人数を収容する場所の確保は難しく、仕方ないことでした。土曜の午前中は日本語補習校の授業があり、学校を利用できるのは午後からでしたが、2時半の開会前には、イギリス人のお父さんたちを含めた父母たちの大活躍により準備完了。正面に掲がったピンクと緑の子どもたちの手形プリントで飾った「ICBA 30 周年おめでとう」の垂れ幕は、20 周年記念のときに作ったもので 2 を 3 に書き換えて再登場。4 に書き換えたら 40 周年にも充分使えます！



俳優さんと一緒に「じゅげむ」

お祝いの会に際し、プロの俳優が語る日本語のリズムや響きを子どもたちに聞かせたいということで、語り芝居の会「で・え・く」の 4 人の俳優さんを日本から招聘し、「ももたろう」「粗忽長屋（そこつながや）」「じゅげむ」の芝居を演じてもらいました。「じゅげむ」の中の長い名前は子どもたちも知っているの、暗唱してきた子どもたちが舞台に参加し俳優さんと一緒に唱える試みもして、楽しく会を終わりました。

各文庫の発表では劇あり、歌あり、百人一首の暗唱ありと盛りだくさんでした。発表する子どもの年齢は幼稚園から小学校低学年。大観客を前にして日本語で何かを演じるのは始めてと案じていたのが取り越し苦労だったというくらい素晴らしい出来でした。文庫のエピソードの紹介も盛り込んだ楽しい司会で会を進めて下さった和服姿のクラーク純子さんは、数年前には文庫リーダーであり、日本では TV で司会経験もある女優だった方です。準備から当日まで、元文庫メンバーの方も含めた大勢の ICBA ファミリーが楽しくこのイベントに貢献し、誰もがハッピーで、「せめて年に一度はこんな集まりがあればいいね」という声もあちこちから聞こえます。

「で・え・く」招聘の経緯

ロンドン支部（2006 年から UK 支部）が出来たのは 1985 年、30 周年を迎えるのは 6 年先ですが、ICBA 創設者のダンさんのお膝元で活動しているという皆様に羨まれる環境にある私たちは、早くから 30 周年記念をどのように祝うか話し合っていました。20 周年の時には、当時ちびっこ文庫のリーダーだったカルデさんの従姉中島久枝さんにお目にかかった幸運により、彼女が制作担当していた NHK の番組「英語であそぼ」の出演者マリーちゃんの記念イベント出演が実現しました。その上、何か記念



開会の挨拶をする森嶋瑤子さん

に残るものという私たちの希望は、この新しいICBAのよき理解者中島さん自身の手でICBAの活動のビデオを作って頂くことにより叶えられました。

30周年のお祝いの会も、子どもたちの演技の他に何か思い出に残る演じ物がほしいとダンさんを始めイベント委員会では考えていました。



こりす文庫のラジオ体操

今度のきっかけは、2008年4月初旬フィレンツェで行なわれた、日本の友人の長女とイタリア人青年との結婚式でした。同席された語り芝居の会「で・え・く」の山本亘さんと私は、初対面の挨拶の後、プロシュートを肴にキアンティ・ワインを飲みながら、彼は落語芝居をしていることを、私は複数の言葉や文化を経験しつつある子どもが急増していること、その子どもたちのための文庫活動であるICBAのことや翌年30周年を迎えることを話しました。イタリアから帰ってしばらくしたら、山本さんから「で・え・く」の資料や写真と共に、

日本国内でも地方の学校などに出前公演をして子どもたちに見てもらっているから、ロンドンにも出前して落語芝居を楽しんでももらえたら嬉しいという熱意あふれる手紙が届きました。プロの俳優さんが演じる日本の文化を子どもが楽しむ機会はロンドンでは滅多に得られません。委員会で協議の結果、思い切ってプロジェクトを始めることになりました。

幸いなことに、2009年は日英交流が始まって150年に当り、大使館ではJAPAN-UK150のプログラムが企画されており、30周年記念イベントに対して支援をして頂くことが出来ました。遠い日本から招聘した4人の俳優さんによるお芝居を日本文化の紹介にも役立てたいとのことで、記念イベントの他にゲンプリッジ、カンタベリー、ロンドンで6回のICBA主催の一般公演をすることが出来、14文庫の子どもたち約150人を含む、合わせて約600人の日本人とイギリス人に楽しんで頂けました。

<<プログラム>>

2:30 開会のご挨拶 UK マネージャー森嶋瑤子
司会紹介 クラーク純子

2:35 文庫出演

こりす文庫 ラジオ体操第一

こまどり文庫 こたわさ劇

ひかり文庫、こじか文庫合同 古典言葉遊びを含む詩の暗唱

かぜの子文庫 わらべうた「きーりすちゃん」

どんぐり文庫 歌「崖の上のポニョ」「どんぐりころころ」

杉の子文庫 劇「おおきなかぶ」

3:20 「で・え・く」第1回目公演 「ももたろう」「粗忽長屋」

3:40 休憩

4:00 文庫出演

びよびよ文庫 百人一首暗唱

ちびっこ文庫 歌「世界にひとつだけの花」

きらきら文庫 歌「みんなともち」

みつばち文庫 歌「こころよ」

こざる文庫 寸劇「おおきなかぶ」

あおぞら文庫、ロンドンさくら文庫合同 アルゴリズム体操

4:30 「で・え・く」第2回目公演 「じゅげむ」子どもと一緒に

4:55 閉会のご挨拶 ICBA、UK 名誉会長 オパール・ダン

5:00 終了

まさかこのような大掛かりなことに発展するとは思っていなかったのですが、ファンドレイジングの機会にも使うことが出来ました。その結果、ICBAの文庫活動を理解して下さる方々の人の輪が一層大きくなったのだとすれば、私たちの活動にとって喜ばしいことです。

(次号は当日の様子をお伝えいたします。)



杉の子文庫の「おおきなかぶ」

戸川陽子さんと一緒に！

9月10日（木）、ハンブティダンブティ文庫に戸川陽子さんが遊びに来てくださいました。陽子さんは長く子どもの英語教育にかかわり、古くから ICBA の文庫活動を理解し応援くださっています。

この日は、Birthday Boy のだいきくんの show & tell から始まりました。だいきくんに関するクイズとアメリカの名所が紹介されたロバート・サプタのポップアップ絵本『**America The Beautiful**』を読みました。そしていよいよ陽子さんと一緒にアクティビティを始めます。手袋人形を使った手遊び『**Blacky & Whity**』。みんなの名前の歌を歌って緊張をほぐしたところに、陽子さんがだいきくんに絵本の読み聞かせのプレゼント。選んでくださったのは『**The Extraordinary Gift**』です。続いての『**Yo!Yes!**（邦題 やあ、ともだち！）』はみなさんもよくご存知の一冊でしょう。初めて友達になるときってちょっと難しいけれど、こんな風に言葉を交わしていくといつのまにか友達ですね。二人組になって、それぞれのパートを感情こめて読みました。



ポップアップ絵本でアメリカを紹介するだいきくん

*ETM=Education through Music

そして秋のお月さまにちなみ「**Sally Go Aroud the Moon**」という歌で ETM*。『**Mon Ami la Lune**（邦題 ぼくのともしちおつきさま）』は、文字のない絵本としても有名ですが、絵にそって陽子さんがお話をしてくださいました。続いて同じアンドレ・ダーハンの『**La Danseuse Etoile**（邦題 きみをみつけた）』は夜空を見上げるのが楽しくなる一冊でした。

また運動会の秋ということで、「**Ready steady Go**」を「天国と地獄」の曲で歌いながら、体を動かしました。最後に読んでいただいたのはアンソニー・ブラウンの『**Gorilla**（邦題 すきですゴリラ）』でした。アンソニー・ブラウンの絵本は背景にも遊び心がいっぱい、子どもたちはお話を聞きながら絵も十分に楽しみました。これは少人数ならではのこことだと思います。



陽子さんが読んでくださる『The Extraordinary Gift』を聞くハンブティダンブティ文庫の子ども達

「文庫の子どもたちが一生懸命お話を聞いてくれてとてもうれしかった」と陽子さんの感想。子どもたちが陽子さんの選んでくださった本の世界に入り込んでいたのをみて、選ばれたお話、絵本の力を再確認した活動でした。

◆楽しいひとときをありがとうございました。
たくさん本を読んでいただき、子どもたちもじっくり聞き入っていました。絵本を使ったアクティビティは、本が大好きなハンブティの子どもたちにはとても楽しかったようです。
陽子さん、またいらしてくださいね！ ハンブティダンブティ文庫 母

◆とっても楽しかった！中でも Blacky と Whity がでてくる、魔法のような手袋を使ったお話と飛び出す絵本のストーリータイムが楽しかった。
ハンブティダンブティ文庫 Yちゃん



陽子さんとハンブティダンブティ文庫の子ども達
大人気だった『Gorilla』の絵本を囲んで



セミージャ文庫
Semilla Bunko
スペイン語文庫

Fiesta de Disfraces



10月17日(土) 桜木町クリーンセンター内の横浜市民活動支援センターにて、ラテンアメリカ青少年の会と一緒に「Fiesta de Disfraces」を開催しました。Fiestaはお祭りで、Disfracesは仮装するという意味で、ハロウィーンのお祭りです。お祭りの中でセミージャ文庫として、タマラさんによるスペイン語の絵本「¿Es hora?」(邦題『もうおふろにはいるじかん?』)の読み聞かせと、カルメン坂本さんによるボリビアの昔話の語りを行ないました。

絵本の読み聞かせは、プロジェクターを使い、本の中の会話のように(お母さんオオカミのことばを子どもオオカミが繰り返す会話)子どもたちとやりとりをしながらの楽しいひとときでした。

カルメンさんによるスペイン語の語りは、歌の好きなアルマジロが自分の命と引き換えに、美しい音を手に入れるお話で、楽器「チャランゴ」の発祥のお話です。カルメンさんのスペイン語の語りに、タマラさんが日本語で訳するという形式で行なわれたので、スペイン語のわからない人にも楽しめましたし、その後でチャランゴの音楽を流したのもすてきでした。(音色が物悲しく、美しかったので、お話を反芻するのにとてもよかったです。)

また会場には、セミージャ文庫の本を展示し、チラシを配り、活動を知ってもらうようにしました。新しい出会いもあり、楽しい会となりました。



「もうおふろにはいるじかん?」
マリリン・ジャンビッツ作
こだまともこ訳 富山房



タマラさんの読み聞かせ
「スペイン語ではなんて言うのかな?」

不況により、国に帰らざるを得ない方たちも多く、ラテンアメリカ青少年の会*も、子どもたちが減っている状態ではあります。しかしこんなときだからこそ、子どもたちの居場所を、自分の国のことばで過ごす時間を、少しの勇気や希望を作っていきたいと考えています。



*「ラテンアメリカ青少年の会」

(CCJL セ・セ・ホタ・エレ) (Centro Cultural de los Jovenes Latinoamericanos)*

横浜市や神奈川県内に住むラテンアメリカ人家庭の青少年に対して、日本における学校生活、日常生活を円滑にするうえで必要な支援を行うとともに、ラテンアメリカ人としてのアイデンティティを大切にするための母国理解を促進する交流会等を開催し、地域における国際交流と国際理解の推進に寄与する。

◆毎週土曜日 13:00~17:00

◆横浜市民活動支援センター4F「ミーティングコーナー」 ccjl-owner@yahooogroups.jp

◇セミージャ文庫は、「ラテンアメリカ青少年の会」に通う子どもの兄弟たちを中心に活動が始まりました。

ICBA Annual General Meeting

The official voice of ICBA

The 39th ICBA General Meeting was held at Tokyo Women's Plaza on June 19th, with Mrs. Chanthasone Inthavong, Representative of Action with Lao Children as a lecturer (Please find a reports of her lecture on the next page). At the general meeting, Mrs. Maruyama, Representative of ICBA gave a report on ICBA activity in 2008 together with its financial report and then talked about its activity plan and the budget for 2009. We had two Bunko Reports: one from Mrs. Sakai of Koala Bunko, and another from Mr. Tetsuta Watanabe, the leader of Melbourne Kodomo Bunko and ICBA Committee Member in Australia. Mrs. Sakai reported about Mrs. Dunn's visit to Koala Bunko in March and Mr. Watanabe told us about the disastrous bushfire in Australia he experienced in February. During break time, we all enjoyed rolls and cookies that Mrs. Mai Morioka of Sakura Bunko had baked for the meeting. The following is an excerpt from Mrs. Maruyama's talk at the general meeting.



It is ICBA's 30th anniversary this year. It was 32 years ago when the first IC bunko named Dan Dan Bunko was founded. For over thirty years IC bunko has continued, probably because it has and continues to meet the needs of the time. But we also know that it is only possible with the tireless effort of mothers and fathers, who have faith in Bunko and pass it on to the next generation.

With the global economic downturn in the biggest financial crisis since the 1930s, we are now questioning the values and systems we have had trust and confidence in for so long. The advancement of communication technologies has led people to rely on the Internet to communicate with others. I believe bunko, which is a community around books and stories where people communicate with each other directly, bears an even more significant role than before in this over-stimulated technological society. At the same time, it may be the time for us to 'reset' bunko as well. For everybody to 'feel good' about bunko, we had better stop to take time to think of what kind of future we want for our Bunko. I would love to hear your opinions and creative ideas. I believe that it is only by sharing ideas with one another that we can set our direction and goal for our future Bunko.

◆ICBA Annual Report 2008 has been distributed at the AGM. Please contact us for a copy.



Mrs. Dunn's Visit to Koala Bunko (March, 2009)

Yukiko Sakai, Koala Bunko

★ The day after her lecture for ICBA, Mrs. Dunn visited Koala Bunko. First, she shared the time with Bunko children reading picture books. Then she gave parents and the people from the public about her approach towards language education for children with multi-cultural backgrounds. She talked about the roll of IC Bunko, the social change involving children and the rolls these children will play in the future society. Her talk impressed the audience deeply.

One year ago, I was lucky to hear Mrs. Dunn's lecture and find that the unique approach of IC Bunko gives the children not only the place to enjoy books and languages but also the place to richly nourish their minds. Since then I have long wanted to listen to Mrs. Dunn's talk with other members of Koala Bunko. I would like to thank ICBA and ex-members of Koala Bunko for supporting us to organize Mrs. Dunn's special visit this time.

Ian Johanssen, Koala Bunko

★ The ideas and stories Mrs. Dunn presented to Koala Bunko was based on her long experience with Bunko in both England and Japan, she believes that it is very important for children to maintain their native language skills and cultural identity as well as any new languages and cultures they might acquire, if they are to become International Children. Her concept of Bunko aims to create an atmosphere in which children can feel "at home" and enjoy speaking to other adults and children while taking part in interesting activities.

Her emphasis is on patiently allowing each child to naturally acquire their second (or third) language the same way they developed their first, through games, stories, skits and songs.

Koala Bunko appreciated the chance to hear of Mrs. Dunn's experiences, and of the movement she started, that continues to influence our children today.



Reflecting Mrs. Chanthasone's Lecture

Ayumi Hidaka, Little Indian Bunko

The non-governmental and not-for-profit organization, **Action with Lao Children** and its international corporation activity between Tokyo and Laos has begun in 1982, under its mission to “build up the reading society (in Laos) by providing books for Lao Children”. Ms Chanthasone, its representative, an extremely intelligent lady with a wonderfully charming character and smile delivered her lecture in excellent Japanese, entertaining us with much humor and wit, which contrasted with her rock solid determination and the enormous amount of hard work she has done, resulting in her achievements which are truly impressive.

Ms Chanthasone began her work from her simple wish to ‘give the children in Laos the joy of reading picture books’. To date her work includes: ① sending Japanese books to Laos; ② providing translations (from Japanese to Lao) and including this with the books; ③ support publishing of Lao books for children; ④ promote training of authors and illustrators for children's books by opening seminars by Japanese picture book authors; ⑤ providing and distributing permanent and mobile libraries to primary schools; ⑥ support the establishment of Children's Cultural Centres (CCC), where children can read books and learn traditional music and dance as part of their self-expression; and ⑦ establishing and representing English and Japanese language schools, as well as being the representative of **Action with Lao Children**.

With **Action with Lao Children**, Ms Chanthasone has been working tirelessly for nearly 30 years since its inception. With her tremendous passion, belief and dedication for her cause, she started the organization from scratch, in the spirit of ‘create if not present, teach if not learnt’. This passion and sincerity of hers is surely why she is so charming and why one cannot but feel the need to help and support her cause in some way.

However, even Ms Chanthasone worries about the fact that children these days do not pick up and read books even if they are readily available to them. She feels this is the negative effect of television and video games, and I realized that this is a common problem around the world.

Reflecting on Ms Chanthasone's lecture, I realized how ‘language’ is truly central to a culture. The form of a language may change subtly over time, but Japanese (or Lao) as our language will never change, however much the number of people who read it decline. If we were ever forced to stop using Japanese (or Lao), I imagine that we would lose our cultural identity. I realized Ms Chanthasone's activities protect and spread rich culture through the medium of picture books, just as we do here at the ICBA.

Her lecture was a great opportunity for me to reflect on the importance and true value of picture books, languages and cultures, and I was greatly stimulated by her endless dedication. Laos..... One day, I hope to be able to visit.



ICBA's 30th Anniversary Celebration Event

Yoko Morishima, UK Branch Manager

On Saturday 10th October 2009, children and parents from 14 Bunko of ICBA's UK branch gathered and had a great time at the 30th anniversary celebration event. The venue was the gymnastic hall of the Japanese School in West Acton, London. Although there are 22 Bunko registered with the UK branch, six of them located too far from London and two new Bunko were unable to come. Since there were no stage facilities in the gymnastic hall, all programmes had to be performed on the floor. This meant compromising views for the audience. We had to compromise



Sen Yamamoto of DE-E-KU



Reciting "Jugemu" with actress

because it was difficult to find a venue large enough for around 300 people, including guests, of whom 143 were children. We could use the hall only in the afternoon because the Japanese Weekend School (Hoshuko) has classes on Saturday mornings. Nonetheless, with outstanding help from parents, including British fathers, everything was ready for the 2:30pm start. The large banner of "Congratulations on ICBA's 30th Anniversary" with children's pink and green handprints was actually made for the 20th anniversary used again by replacing the 2 with a 3. We are sure it will be of use again for the 40th anniversary by a similar replacement!

For this celebration, we wanted children to listen to rhythms and sounds of the Japanese language spoken by professional actors and actresses. Therefore, we invited four actors of theatre group DE-E-KU, who performed the dramas "Momotaro", "Sokotsu Nagaya" and "Jugemu". As some of the children were familiar with a very long name in "Jugemu", they tried to recite it with the performer. By the end of the event, we were thoroughly entertained and had a great time.

A variety of performances by the children of each Bunko entertained us as well. They played dramas, sang Japanese songs and recited "Hyakunin-issu (one hundred waka poems)". We were slightly worried because the children, aged from three to seven, had never performed in



Ms Morishima, making an opening speech

Japanese in front of a large audience. However, they proved us wrong and gave excellent performances. Mrs. Sumiko Clark made a good job of being hostess and amusingly introduced each Bunko. She is a former Bunko leader and used to be an actress and TV presenter in Japan. From preparation to back-stage chores on the day, a large ICBA family including former Bunko members contributed to the celebration. Everyone was happy, and many people wished for a get-together like this at least one a year.

How and why we invited DE-E-KU

It is still six years before the 30th anniversary of the UK branch. The London branch, which became the UK branch in 2006, was established in 1985. We started planning ICBA's 30th anniversary a long time ago

because we were fortunate to have Mrs. Dunn, the founder of ICBA, living nearby.

For the 20th anniversary, we had "Mari-chan" who was a popular girl character in NHK's television programme "Eigo de asobo (Let's Play in English)" at our celebration event. We were lucky to have met Ms. Hisae Nakajima, the producer of this popular TV programme and a cousin of Mrs. Kalde, then a Leader of Chibikko Bunko. Ms. Nakajima became a great friend of ICBA and kindly produced the video recording of the celebration. This fulfilled our wish to make something to commemorate the anniversary.



Radio Taisho by Korisu Bunko

For the 30th anniversary, the event committee members including Mrs. Dunn were wondering if we could again have some special ingredient in the celebrations. Fortunately, at the wedding reception of my Japanese friend's daughter in Florence in April 2008, I first met Mr. Sen Yamamoto of "katari shibai no kai" (theatre group) DE-E-KU. We talked over prosciutto and Chianti wine. He is a professional actor performing drama based on Rakugo. I told him that there was a rapid increase in the number of children who speak more than one language and who have multi-cultural experiences. I said that ICBA has been

<<Programme 10 October 2009>>

- 2:30 Opening Speech : (ICBA UK Manger)Yoko Morishima
Introduction of the presenter, Sumiko Clark
- 2:35 Bunko children's performance
 - Korisu Bunko / Radio Gymnastic Exercises (Number1)
 - Komadori Bunko / The Play of Proverbs
 - Hikari Bunko & Kojika Bunko / Recitation of Old Poems
 - Kazenoko Bunko / Children's Song "Ki-Risu-Chon"
 - Donguri Bunko / Song "Gake nno ue no Ponyo"
"Donguri korokoro"
 - Suginoko Bunko / Play "Ookina Kabu"
- 3:20 "DE-E-KU" performance #1
- 3:40 Interval
- 4:00 Bunko children's performance
 - Piyo piyo Bunko
/ Recitation of the Hundred Poems by Hundred Poets
 - Cibikko Bunko / Song "Sekai ni hitotsu dake no hana"
 - Kira kira Bunko / Song "Minna tomodachi"
-Kira kira Bunko version
 - Mitsubachi Bunko / Song "Kokoro yo"
 - Kozaru Bunko / Play "Ookina Kabu"
 - Aozora Bunko&London Sakura Bunko/ Arugorythm Exercise
- 4:30 "DE-E-KU" performance #2 "Jyugemu" (together with children)
- 4:55 Closing speech: (ICBA Honorary President) Opal Dunn
- 5:00 Ending

providing these children with opportunities to read Japanese books and would celebrate its 30th anniversary the following year. After a while, I had a lovely letter from Mr. Yamamoto saying that as his theatre group occasionally travelled to the Japanese countryside to perform for local children, they would be delighted to come to London so that our children could also enjoy their performance. Some information and photographs of DE-E-KU were enclosed. In London, children rarely have an opportunity to see and enjoy Japanese traditional drama performed by a professional company. The event committee made the brave decision to take on this project. And, luck was with us again. The Japanese embassy was organising the Japan-UK 150 programme for 2009 to celebrate 150 years of diplomatic relations between Japan and the UK. ICBA's 30th anniversary event became a part of it

and so received help and support. It was a good opportunity to introduce Japanese culture through traditional drama so, apart from our celebration event, we also organised six public performances by these professionals in Cambridge, Canterbury and London. In addition to 150 children from 14 Bunko, more than 450 Japanese and British people in total enjoyed these shows by DE-E-KU.

We never expected that this 30th anniversary would develop into such a large event. It turned out to be a good fundraising opportunity for us. Moreover, it greatly extended the circle of people who understand and advocate ICBA's activities, giving us all a great pleasure and satisfaction. (to be continued)

ICBA REPORT!

The official voice of ICBA



Humpty Dumpty Bunko
Tana, Yokohama



Thank you, Mrs. Togawa!



Mrs. Yoko Togawa visited Humpty Dumpty Bunko on September 10th. We had a great time with her.



"Blacky and Whitey"

First, Daiki, Birthday Boy for the month had a quiz show and read "**America The Beautiful**" by Robert Sabuta. Then Mrs. Togawa played "**Blacky and Whitey**" using glove puppets she had made and read two fabulous books: "**The Extraordinary Gift**" by Florence Langlois and "**Yo! Yes?**" by Chris Raschka. You might have heard about "Yo! Yes?" as it won Caldecott Honour Book Award in 1994. The story is about two children who do not know each other but communicate with simple words such as "What's up?" "Not much", and become good friends in the end.

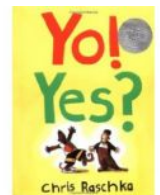
The themes of the day were "Moon" and "Sports Day." So we played "**Sally Go Around the Moon**" and "**Ready Steady Go**" with Mrs. Togawa. Then she read "**Mon Ami la Lune**", "**La Danseuse Etoile**" by Andre Dahan, and "**Gorilla**" by Anthony Brown.

We enjoyed all the books she read for us. Above all "Gorilla" was best.

We have been already looking forward to Mrs. Togawa's next visit!

(Japanese P6)

"Yo! Yes?"
Chris Raschka



Semilla Bunko
Sakuragicho, Yokohama



Fiesta di Disfraces



"¿Es hora?"
Marilyn Janovitz

On October 17th, we celebrated "Fiesta di Disfraces" together with Centro Cultural de los Jovenes Latinoamericanos at Yokohama Citizens Empowerment Center in Sakuragicho. Fiesta means "party" in English and Disfraces means "dress up". "Fiesta di Disfraces" is a Spanish version of Halloween Party.

Tamara and children of Semilla Bunko read a picture book, "**¿Es hora?**" together: the children repeated after Tamara reading Spanish lines. The story is about a conversation between mother and child. Then Carmen told a story from Andean area. It is about an instrument called Charango. After her storytelling, we all listened to the music played by Charango. It was beautiful but sorrowful.

With the economic downtown, many people from Latin America lost their job and had to leave Japan. It becomes more important for us to create a 'feel good' atmosphere at bunko where children feel secure and confident in themselves and in knowing about their heritage. (Japanese P7)



ICBA Announcements!

The official voice of ICBA



Become an ICBA Member!

The International Children's Bunko Association (ICBA), as a non-profit organization was founded in 1979 to help with the administration of the growing number of the IC Bunko in different languages in Japan and now world-wide. At present, there are 11 IC Bunko in and around Tokyo in English, French, and Spanish and 30 IC Bunko outside Japan (England, America, Australia, Germany, France, China, Brazil and Indonesia) in the Japanese language.

New members are welcome. We are offering various programs for the general public.

Yearly Membership Fees:

General members: ¥1,500/ per family

Individual Support Members: ¥3,000/ per person

Organization Support Member: ¥10,000/per unit (Fiscal year June to May)

Members will receive an ICBA newsletter and lecture or workshop information with a discounted price.



ICBA International Children's Bunko Association

For inquiry: Email icba@g00.itscom.net TEL & FAX 81-45-903-1744

Postal address: 1-1, Kaguragashi, Shinjyuku-ku, Tokyo 162-0823, JAPAN



ICBA

Committee Members

Honorary President: *Opal Dunn*

Representative ICBA: *Akie Maruyama*

Secretary: *Keiko Masuoka*

Treasurer: *Ayako Ohtaki*

Creative Music Director: *Mickey Shiomi*

Overseas Bunko Coordinators:

Eriko Matsunami, Sumiko Akimoto

Public Relations: *Yuko Kaiho*

Overseas Committee member Australia:

Tetsuta Watanabe

UK Manager: *Yoko Morishima*



NOW AVAILABLE!

ICBA 20th Anniversary DVD

Bilingual in English and Japanese ¥1000
icba@g00.itscom.net / Attn: Keiko Masuoka



Contact us to meet!

If you have any plans to visit Japan or to return to Japan. Please contact us! Let's exchange our thoughts.

icba@g00.itscom.net / Attn: Eriko Matsunami

Join us on ICBA mailing list!

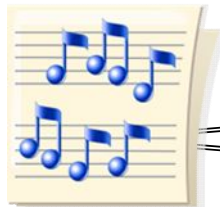
icba@g00.itscom.net / Attn: Yuko Kaiho



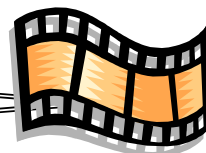
Further Information about ICBA on web

International Children's Bunko Association web: <http://home.n03.itscom.net/icba/>

ICBA UK Branch web: <http://kodomobunko.org.uk/index.php>



♪ Mickey's Music Workshop ♪



順番決めの歌

Eenie, meenie, minie, moe,
Catch a tiger by the toe,
If he hollers let him go,
Eenie, meenie, minie, mo.

Mickey

★英語圏の子どもたちが、順番を決める時などによく歌う数え歌です。音が面白く、ふざけていて特別な意味はありませんが、rhyme と rhythm を楽しんでください。輪になってひとり一語ずつ言って、最後の mo にあたった人が、it (おに) です。

*ICBA 音楽ディレクターみっきいが、映画の中の良い音楽を紹介します。

すてきな 映画音楽 紹介

Home Entertainment

「Sweet Rain」死神の精度 (2007 年 日本)

監督：筧 昌也

音楽：ゲイリー芦屋

主題歌：『Sunny Day』 藤田一恵



原作は伊坂幸太郎の短編集である。

雨とともに人間界に赴く死神は対象者を一週間調査した後に死んでもいいかどうかを判断して、「実行」または「見送り」の仕事をする。金城武が演じる死神は軽妙な持ち味で見ていて楽しい。藤木一恵（ヒロイン小西真奈美の役名）が歌う『Sunny Day』は映画とぴったり合い、作品に込められた思いが観客に確かに届く美しいバラード。過去から未来へのオムニバスの最後で3つのストーリーが繋がった時の心地良さはさすが伊坂ワールドである。

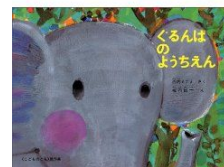
私たちは大切な人との永遠の別れを幾度も経験しなければならないが、こんな死神が本当に存在するならば、別れは最悪のものではないと思えてくる。

「死」とはどんな意味があるのかをさらりと考えることが出来る、見終わった後とても気持ちのいい映画だ。

おまけの 展覧会レポート

Great Exhibition

「ぐるんぱのようちえん」
西内ミナミ作 堀内誠一絵
福音館書店



「堀内誠一 旅と絵本とデザインと」

2009 年 7 月 4 日～9 月 6 日

世田谷文学館（東京世田谷区）にて開催

絵本『ぐるんぱのようちえん』（1965 年 西内ミナミ作 福音館書店）、『ふたごのじてんしゃ』（1965 年 渡辺茂男作 あかね書房）の絵や、雑誌「アンアン」（1970 年 平凡出版）の表紙のロゴなどで知られる堀内誠一の展覧会に行った。たくさんの肩書きを持ち、その仕事の幅に驚いた。絵本作家、デザイナー、イラストレーター、旅行作家、写真家として多方面で才能を発揮し、注目を浴びた時代の寵児だったが、1987 年 50 代の若さでこの世を去った。堀内氏のシャープで温かい感性で作られた作品の数々は、今も世界中の人々に愛され幸せな気分をもたらしている。

小さいスケッチブックに描かれた幼年期のイラストは、既に将来への道が決まっていたかのように独創的で非常に興味深かった。

◆運営委員活動報告 2009年6月～10月

- 6月
 6/5 運営会議
 6/12 丸山代表 実践女子大学にて講義
 6/15 ニュースレター印刷/運営会議
 6/19 ICBA 総会/チャントソンさん講演会
 6/22 国際子ども図書館を考える全国連絡会第15回
 通常総会記念講演会 渡辺鉄太講演会(出版クラブ)
 6/26 関係資料印刷/語り芝居の会「で・え・く」観劇
 6/26 さくら文庫訪問(つくば市)
- 7月
 7/3 運営会議
 7/17 文庫開設希望者と会合(カリア国にて)
 7/20 そらまめ文庫室内さんと会合
 7/24 運営会議
- 8月
 8/7 JBBY 勉強会参加「日本の外国籍児童の現状」
- 8/11 UK あおぞら文庫永江さんと会合(カリア国にて)
 8/17 運営会議
 8/21・27 フェスティバル会場取り
- 9月
 9/4 運営会議
 9/11 文庫ミーティング
 9/12 セミージャ文庫会合
 9/20 アルカンシエル文庫訪問
 9/25 運営会議
- 10月
 10/2 運営会議
 10/15 セミージャ文庫図書整理
 10/16 フェスティバル会場下見/文庫ミーティング
 10/17 セミージャ文庫ハロウィンフェスタ
 10/21 丸山代表 立教大学にて講義
 10/25 元だんだん文庫宮田理奈子さん出版記念講演



◆ICBA会員 募集!

ICBAは、一般の方も参加できるさまざまなプログラムを計画しています。キーワードは、「本」「多文化」「ことば」です。

(会計年度6月～翌年5月)

- * ICBA 会員(一般、文庫メンバー含む)・・・1500 円/年
- * 賛助会員・・・(個人)一口 3000 円/年
(法人)一口 10000 円/年

会員には、ICBA ニュースレター(年に数回)の配布、講演会・ワークショップなどのご案内をさせていただき、会員価格にてご提供いたします。

ICBAへの入会お申し込み・お問い合わせ:

E-mail: icba@g00.itscom.net

または、電話&ファックス: 045-903-1744

◆ICBA 運営組織

名誉会長: オパール・ダン

代表: 丸山明栄

事務局: 増岡桂子

会計: 大滝文子

音楽ディレクター: 塩見みゆき

海外文庫: 松浪エリ子 秋元澄子

広報: 海保由子

運営委員在オーストラリア(メルボルン): 渡辺鉄太

UK 支部マネージャー: 森嶋瑤子



◆一時帰国・本帰国される方へ

長期休みの一時帰国や異動で帰国される方、私たち ICBA 運営委員まで、ご一報ください。現地の情報など教えていただけませんか? 日本での各種イベントの紹介、本の購入の相談、その他、お伝えしたいことがあります。情報交換していきましょう! まずは海外担当松浪までメールをください!
icba@g00.itscom.net / 松浪エリ子宛

◆ICBA 20周年記念DVD 販売中

(日本語/英語切り替え可) 1000円

お問い合わせは運営事務局・増岡まで

◆本のご寄贈 Book Donation

英語絵本 多数



【おひさま文庫 永江さんより】

「オスカー・ワイルドに学ぶ人生の教訓」

サンマーク出版

【宮田理奈子(著者 グレース宮田)さんより】



編集後記: 今年一番の話題は政権交代。持ち越されてきた無駄を省く姿勢は評価する。だが来年度予算の圧縮を目指す事業仕分けの対象として『子どもの読書推進事業と子どもゆめ基金』が挙げられ、助成を受けている数々の事業を思うと複雑な思い。(ゆ)



ICBA Newsletter No.69 November.2009, Publisher: Akie Maruyama

Editor: Yuko Kaiho, Tetsuta Watanabe

International Children's Bunko Association Tel/Fax: 045-903-1744,

e-mail: icba@g00.itscom.net

国際児童文庫協会ニュースレター 第69号 2009年11月 発行:丸山明栄

編集: 海保由子, 渡辺鉄太

MY BOOKSHELF

The official voice of ICBA



このコーナーは、ICBAの仲間の本棚から、絵本に限らず多岐に渡った本を紹介しています。本との出会いは人との出会いでもあります。今回みなさんはどんな本に出会えたでしょうか？その本の向こうにいる人に出会えたでしょうか？また、あなたのオススメの本を通して誰かと出会ってみませんか？

**絵本のガイド本を、お持ちですか？**

『ぼくの絵本 わたしの絵本 ー0歳から6歳までの絵本ガイドー』

石川道子・平田美恵子・湯沢朱実 編/著 プラニング遊 2005年 1470円

これは、長年読み聞かせをしてきた3人によって書かれた絵本ガイド本です。特徴は、いつもは読み手の3人が、お互い声を出して読み合い、聞き手として本を選んでいること。そうすることで絵本は「読んでもらうもの」と実感できたそうです。本の紹介は親しみのある文章で、実際に子どもに読み聞かせたことが随所にうかがえます。子どもの回りにはほんとうに多くの本が存在していますが、短い子ども時代に、子どもの年齢とその成長に合った絵本を手渡すのが大事だということで、本の紹介は年齢ごとに纏められています。また挙げられた93冊の絵本を総て読まなければならないということではなく、その中から子どもに合ったもの、好きなものを選ぶようにという言葉が添えられていることから、著者たちの子どもを尊重している姿勢がわかります。表紙だけでなくページ内がカラーで見られるのもうれしいです。(運営 海保由子)

彼は何者だったのか？

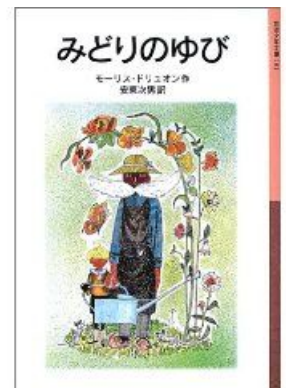
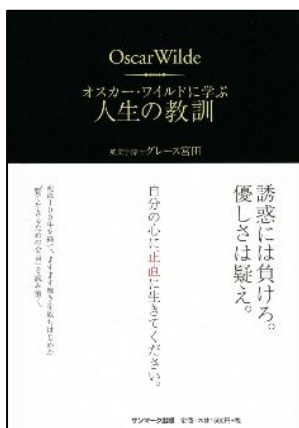
『みどりのゆび』 モーリス・ドリュオン著 ジャクリーヌ・デュエーム絵

安藤次男訳 岩波書店 2002年 672円

かれこれウン十年前の小学生の頃に手にしてすぐに夢中になりました。主人公チトの恵まれた境遇、庭師との出会い、「みどりのゆび」という類まれな才能を発見し、それを使って次々に起こる奇跡、小学生の心をくすぐるものばかりです。

「みどりのゆび」という言葉は、園芸に才能のある人を指すそうです。チトが触れると何もないうところからどんどん植物が生えてきて緑や花でいっぱいになってしまうのです。これで暗くわびしい刑務所や病院などを次々と変えていきます。

しかし一方で、チトの住む町は大砲を作る町、そして父はその大砲工場の経営者であり、兵器商人なのです。自分の恵まれた生活はそんな背景に支えられていることを見せつけられ、チトは悩みます。そんな中、戦争が起こり、チトはある決心をします…。物語もさることながら、美しい挿絵も魅力のひとつです。ぜひ手ににとってご覧いただきたいと思います。フランスに住むことになり、フランス語が身近になって初めてこの本がフランス語で書かれたものであることを知りました。ぜひ原書を手に入れてみたいと探しましたが、意外と大変だったのはこの本がもう古典になっているからなのではないでしょうか。いつかはこの本を文庫で読み聞かせてみたいですね。(アルカンシェル文庫 佐々木晶子)

**「自分の心に正直に生きてください。」**

『オスカー・ワイルドに学ぶ人生の教訓』

グレース宮田 著

サンマーク出版 2009年 1575円

これほど人の心を捉えるコピーはないのではないのでしょうか。著者は、ウン十年前にだんだん文庫に通っていました。幼年期を英国で過ごし、帰国。慶応義塾大学法学部を経て、オスカー・ワイルド研究を始め、2007年には専修大学大学院博士課程修了。米国で出版された研究書『Oscar Wilde and Class』は、大英図書館やオックスフォード大学図書館にも所蔵されているそうです。アイルランド出身、同性愛者、非貴族階級と異端であったワイルドが、保守的な19世紀末の英国ヴィクトリア朝時代の社交界でその地位を確立した秘密を、軽妙な文章と原文である英文とであぶりだしています。ぜひ一読を！(運営 海保由子)